

朝晩が冷え込むようになり、長袖の季節になりました。ケヤキやサクラ、ドウダンツツジなどの葉が色づき始めました（写真1）。また前号で紹介した十月桜（写真3右下）が見ごろを迎え、同じく二季咲きの子福桜（写真3左下）も咲き始めました。

★ 見どころ情報

コウヤボウキ（高野箒）キク科コウヤボウキ属（写真2左）

樹高1m弱と小型の落葉低木で日当たりの良い林縁に自生します。枝の寿命は2年で、葉は、1年目は丸く1枚ずつが互生しますが、2年目になるとは細長く3~5枚が束になります。また葉裏や葉柄、枝に白い毛が多く生え、鋸歯はまばらに入るのも特徴です。花は9~10月頃、1年目の枝先に13個の白い筒状花からなる頭花を1つずつつけ、直径1~2cm、花冠の裂片は細く反り返ります。

和歌山県高野町の高野山では竹箒の使用が禁じられ、代わりに細くしなやかな本種を箒の材料にしたことがコウヤボウキの名の由来といわれています。なぜ竹箒の使用が禁じられたのでしょうか。理由は高野山の伝説に見ることができます。その伝説とは、「その昔、高野山では大蛇の様な毒蛇が参詣人を襲っていた。これを聞いた開祖弘法大使は嘆き、竹の箒で大蛇を封じ込め、再び竹の箒を使う時代になれば封じを解くと約束された。」という内容です。これでは竹箒を使えませんね。

このコウヤボウキには、よく似た同属のナガバノコウヤボウキがあり、こちらは無毛の枝葉を持ち、葉の鋸歯はコウヤボウキより多く、花は2年枝の短枝につきます。

場所：さくらの森入口，出合いの広場下，東山作業路

チャノキ（茶の木）ツバキ科ツバキ属（写真2右）

中国西南部からベトナム、インドにかけての地域が原産地といわれ、わが国には奈良時代に初めて持ち帰ったといわれ、当初は薬用として利用されていましたが、鎌倉時代に僧栄西が種を持ち帰って以降、栽培と喫茶の習慣が広がりました。花は10~11月、枝先の葉腋から下向きに直径2~3cmの白花を咲かせます。緑茶用には低木で葉が小さい変種シネンシスが利用され、アッサムと呼ばれる高木の変種は紅茶用に利用されます。日本で栽培されているのはシネンシスの系統です。

場所：温室前

カンレンボク（旱蓮木）オオギリ科※カンレンボク属（写真3右上）

中国中南部原産の落葉高木で大正時代に渡来し、公園樹などで利用されています。夏に花を咲かせ、現在結実しています。果実は長さ2~2.5cmのバナナ形で球状になります。別名を喜樹（キジュ）といいます。（※APG：ミズキ科）

場所：薬草園横

この他、野生きのこでクチベニタケ科のクチベニタケ（写真3左上）の発生を東山作業路で確認しました。径は5～10mm、頂部にある赤橙色で星形の孢子撒布孔が特徴的で、口紅を塗っている唇に例えて名付けられました。

★園内見頃状況まとめ

開花	コウヤボウキ（写真2）、チャノキ（写真2）、十月桜（写真3）、子福桜（写真3）、アケボノソウ、マツカゼソウ 他
果実	カンレンボク（写真3）、シロダモ、どんぐり類、ツチアケビ 他
紅葉	ドウダンツツジ（写真1）、サクラ類（写真1）、ケヤキ（写真1） 他
きのこ	クチベニタケ（写真3）他

<お知らせ>

秋の臨時開園について

11月27日（日）までは**全日開園**します。11月28日（月）は**休園**になります。
紅葉の園内をゆっくりお楽しみください。



写真1左上 ケヤキの紅葉（出合いの広場） H28.10.17



写真1右上 オオモシジ 色づき始め（管理事務所前 H28.10.17



写真1左下 ヤマザクラ紅葉（見本園）



写真1右下 ドウダンツツジ紅葉（見本園） H28.10.17



写真2左 コウヤボウキ (出会いの広場下) H28.10.17



写真2右 チャノキ (作業舎横) H28.10.17



写真3左上 クチベニタケ (東山作業路) H28.10.17



写真3右上 カンレンボク果実 (薬草園横) H28.10.17



写真3左下 子福桜 (見本国入口) H28.10.17



写真3右下 十月桜 (苗畑) H28.10.17